

神奈川県 真鶴町の 繁殖業者摘発についての中間ご報告 (むごたらしい写真もありますが、実体ですので、ご容赦下さい)

サポーター様、お問い合わせいただいた方へ、9月中旬に保護した「真鶴の施設」の事案について、ご報告させていただきます。むごたらしい写真も掲載いたしましたが、事実を正確に知っていただく為にも、ご容赦くださいませ。始めに、お断りさせていただきました。

1. 事件の経緯をご説明いたします

以前から、ブリーダーも含めた繁殖業者の劣悪な実体は、良く知っていましたが、その情報元が匿名であったり、連絡が取れなくなったりして、実際に救助できる事例はあまり多くありませんでした。しかしながら、今回の事例は、情報提供者が勇気ある方で、実名で、施設の内容をビデオや写真でお送りいただき、また、実際に現場に同行していただけたので、救助する事ができました。

9月の始めに知ったのは、神奈川県下の小田原市と湯河原町の間地点、真鶴半島で有名な町の山中で、別荘を改造して繁殖場に行っている、I氏という女性経営者が、不必要となった台雌（子犬出産用の雌犬）や種雄に、一切水も餌も与えずに、次々と餓死させているという、事例でした。情報提供者と、9月12日に現地に赴くことを約束し、一方で、神奈川県県庁と動物管理センターへ、要望書や電話で、調査への同行や行政指導、ボランティアが世話や里親探しをする仲介、等をお願いしましたが、一切を拒否されました。この不思議な雰囲気の原因は、後日、判明することになります。

当日、現地に到着すると、他の現場にあるような生体反応が一切ありません。通常は、餌を貰えると思った繁殖犬が吠えたり、近づくだけで悪臭に顔を歪めたり、ゴミを避けたりと、生きている証拠があるものですが、一切感じられません。フェンス越しに情報提供者が犬たちに声をかけても反応が無く、「死んじゃった!？」との叫び声に、フェンスを開けてベランダの奥に進むと、数個のバリケンネルが置かれていて、その中の一頭ずつ、丸まって入っていました。辛うじて生きていた二頭と、死んだばかりと思われる3頭です。(写真 上段 中央)



上段左から ケージに詰め込まれた犬 (8月中旬) バリケンネルから出した死体 バリケンネルの中でミイラ化した死体 下段 救助した瀕死のラブラドル2頭 及び ビーグル3頭

バリケンネルから辛うじて生きている2頭のラブラドルを出すとすると、ヨロヨロと腰に力が入らずに、自分では歩けません。広い場所へ移し、水を与えると異常な早さで飲み始め、直ぐにオシッコをしてしまいます。あまりの脱水症状に、吸収できなくなっているのです。

生きていた犬たちに食事を少しずつ与え、その間にバリケンネルに入っていた死体3頭を出してあげます。体を伸ばして休めないほど狭い場所に入れられていて、その痩せ方は、生きていた犬と同様、骨格標本に皮を張り付けたような姿です。日当たりが少しだけ良かったために、生死を分けたのでしょう。

この家屋の下に建てられたプレハブを調べると、十数個重ねられたバリケンネルのそれぞれに、ミイラ化した死体が入っているのを発見しました。異常な脱水と餓死ですから、腐る脂肪や肉、水分もなく、そのままミイラのように枯れ落ちています。

そんな状態を確認し、神奈川県動物管理センターに調査に来て頂こうと携帯から電話を入れると、驚くことに、「昨日、その場所は指導に入ったから、行かない」と断言します。昨日、いろいろな要請に電話を受けつつ、以前から知っていたこの場所に来て、証拠隠しを「指導」していたのです。

行政の支援も受けたら無いことが判明しましたので、このまま放置すれば死は確実ですので、生きている5頭と死んだばかりの3頭を連れ帰る事にしました。所有者から訴えられれば、家宅侵入や窃盗は免れることはできませんし、動物管理センターは自分たちの責任を回避する為に、救助する必要な無かったと、言い張るでしょう。

ビーグル3頭はケージに入れたまま車に運び、殆ど動けないラブラドル2頭を3頭の死体は抱きかかえ、車に積み込み、横浜までの運搬に絶えられるように水などを与えながら、帰路に就きました。

途中、小田原警察署により告発の相談に寄ると、死体や瀕死の状態を確認してくださり、前向きにお話を聞いてくださいますが、管理センターに問い合わせたところ、主管業務であるセンターで指導すると返答があったとのことで、センターに行くことをアドバイスされました。

横浜までの道すがらですから、平塚市にある神奈川県動物管理センターに寄り、死体の解剖と死因の特定、火葬と埋葬、業者への指導をお願いしましたが、全て拒否され、死体も持って帰るよにとの事です。また、前日職員が施設内に入り、発見した死体3頭が生きていた事、11日中に業者に真鶴から小田原に犬を移動するように指導していたことが判明しました。

つまり、YDRや情報提供者に状態を確認されないように、手を打っていた訳です。

「業者に分からないように、蜘蛛の巣を避けて入って、大変だった」などと自慢げに話す職員を見つ、この国を壊しているのは公務員だと明確に悟ることが出来ました。

その後、いつも救助された汚く傷ついた犬を診察してくださる獣医さんに検死をお願いし、生きている犬の健康診断を行い、通常体重30キログラムのラブラドルが12キロしかなく、死体は筋肉もなくなっているのです。死後硬直も出来ない等、いろいろな事が分かってきました。

素手で触りながら検死をしてくださる獣医に感謝しながら、本当ならば生きて乗るはずの診察台の上に横渡る犬たちに、敵を打ってやると約束しました。

現場に案内するだけが、横浜まで犬たちを運び、お通夜の準備までして呉れた情報提供者や、留守を守ってくれていたボランティア、明朝一番で火葬のお迎えという無理を気持ちよく引き受けてくれた業者さんなど、本当に感謝する一日でした。

現在、連れてきた5頭の犬たちは、電解質の水や特別食で徐々に危機を脱しました。生まれてからケージ暮らししか知らない犬たちが、太陽溢れる庭を興味深く歩き回るのを見つめながら、健康と飼い主との喜びを取り戻して上げようと思っています。疥癬等の皮膚病、白内障、腸の機能低下からくる消化不良、耳ダニ等、リハビリには一年以上必要と思いますが、頑張っで呉れるでしょう。

所有者への告発も、動物管理センターが異常な動きをしている事を理解し、小田原警察署も積極的に捜査に入っでいただいています。強制捜査が、この国で初めて行われました。所有者は、司法によって裁かれるでしょう。最低限の正義を見つけれられた気分です。これで、捜査手法や前例が確立されましたので、他の警察署も同様の事例に介入できるようになるでしょう。死んでいた犬たちの最大の功績でしょう。今後は、県の犯人隠避や証拠隠滅行為への告発や、被疑者がまだ所有している犬たちの救助の準備など、未解決の問題も山積みです。今後とも、見守っでいただきたく、お願いいたします。

2003年10月21日

YDR北浦